
性の水音

あんこだま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

性の水音

【Nコード】

N2993L

【作者名】

あんこだま

【あらすじ】

だって、聞きたかったんだから、仕方がないじゃないかあー！

放課後、下校中の小学生たち。その中に一人の少女の姿があった。背中まで伸びた茶色いロングの髪。大きくないがクリツとした目。全体的に女の子らしさの出してきた、丸みを帯びる体。となりで一緒に歩く男の子と、喋りながら帰って行く。

ちなみに男の子の名前は、祐。女の子の方は、弥生と言うらしい。

せまい裏道り。さびれた商店街。二年前に潰れた八百屋の看板が赤く錆びている。肉屋の前でコロツケを揚げる匂いが流れてきた。二人は会話を、わずかに止めた。

「お腹すいたね」

一瞬の沈黙の後、再び熱心に昨日のアニメについて語る祐に、少女はにっこり笑って問いかけた。その笑顔を見た後、祐は鼻の頭をかいて下を向いた。最近自分でも解らないまま、弥生のことを一人の異性として見てしまっているようだ。ふふん。いわゆるお年頃と言っ奴である。

2

祐は今日、クラス発表会の資料と一緒に書く約束をしていた。祐と弥生の家はお隣さん。小さい時からの幼馴染だ。小学六年生になった今でも、自然に仲良く遊んでいる。友達と言うより兄妹みたいな感じだったが、最近は少しずつ女の子らしくなっていく弥生に、祐も意識しはじめている。

二階建ての小さな一軒家。弥生はワンピースのポケットから、合鍵を取り出した。家にお母さんはいない。お父さんと二人で暮らしているのだ。だから日中のこの時間は誰もいない。家の中は電気が点いておらず、薄暗かった。今日は勉強をしに来たので、祐は居間ではなく二階にある弥生の部屋に案内された。久しぶりに入る。

いつも外で遊んだり、家の中で遊んでも居間にいて、ほとんど弥生の部屋に入ったことはなかった。以前入ったときは、ただ勉強机があるだけの、物置のような部屋、のはずだった。

「あ」

しかし、今はそこに真新しいベッドや本棚があった。女の子らしい縫いぐるみや人形などはなく、かわいいキャラクタの小物入れや、淡い青のカ、テンでサツパリとまとめられている。

「あああ」

部屋の中はリンスのような、甘酸っぱいような、いい香りが漂っていた。女の子の匂いだ。

「んっ。祐ちゃん、どうしたの？」

弥生の声に、はっと我に帰る祐。部屋の匂いを胸一杯に吸いこんだ祐は、思わずうっとりしていたのだ。弥生は不思議そうに祐の顔をみている。

「へ、部屋の中、暑いね」

確かに部屋の中は、少し蒸し暑かった。弥生が窓をあける。部屋の中に、五月の少し湿った風が入り込んだ。

「あっ、その文字大きく書いといたほうがいいよ」

発表会の資料作りは、テキパキと進行していった。弥生も祐も、この手の作業が好きなのか、二人とも黙々と手を動かして続けている。

「もう 頑張りだね」

そう言い終わると、弥生はぐいっとコップの中の麦茶を飲み干した。汗をかいた空のグラスが、フロリングの床に置かれる。ちらっと弥生のことを横目で祐は見た。なんだか弥生の様子が少し、落ち着きがないように見える。床に広げた資料を書くため四つんばいになった弥生。なぜか、ひざとひざとを擦りつけるようにしたり、ワンピースの裾を触ったりして、落ち着きがなかった。

「祐ちゃん。ちょっとオシッコしてくる」

沈黙をやぶる声。弥生はそう言うと、元気良く立ち上がり部屋を出ていった。

祐はその言葉に少しびっくりした。いくら幼馴染とは言え、小学六年生にもなった女の子の、オシッコしてくるという台詞に、祐の胸はどつきんこんと揺れ鳴いたのだ。

祐はすぐにトイレに向かった。悪いとは思っている。でもどうしても聞きたかった。自分でもわからない、頭のモヤモヤがそうさせるのだ。あせりながらも、足音をたてずに階段を降りる。そして張りつくようにトイレのドアに、耳を押し当てた。ドアと頭で擦れた髪の毛の、ジヨリツとした感触がおでこに伝わる。

これで三回目だっけ。

祐はそう頭の中で呟くと、全神経を耳に集中させた。

シユルルツ、という布ずれの音。その後に「んしょっ」という声があった。

しゃがんだのだろう。そして、細い滝糸のような水音が、祐の耳に入ってきた。普通に聴いたら、ただ水が流れる音である。しかし祐にとって、これは意識してる女の子の、紛れもなく出す音なのだ。目をつぶると、ドア越しの情景が目には浮かんだ。きっと弥生はこうして聞き耳をそば立てる自分の存在に気づかず、水を流して音を消すこともせずに、用を足しているのだと。

祐は罪悪感を覚えながらも、鳥肌が立つような快感を覚え、なおも耳が白くなるほど、ドアに押しつけ聞き入った。だんだんと水流の音が小さくなっていく。祐は部屋に戻ろうと、ドアから離れた。が、その時だった。

「やっぱり聞いてたんだ」

トイレのドア越しから、弥生の声が放たれ、祐の動きが止まった。次の瞬間、頭の中が真っ白になった。終わったと思ったり、自分の事がひどく恥ずかしく思えたり、バレたことを悔しく思えたり、親

に告げ口されたらどうしようか。そんな様々な感情が瞬く間に身体を駆け巡り、祐の全身をむしばんでいった。

「いやっ、だからっ、その、これはっ……」

祐は歯の根の合わない、震える声で弁解しようとした。すると、

「おあいこかな〜 これで」

「お、あいこっ?」

祐は、すっとんきょうな声を上げた。よく知る弥生の性格。その反応が、実に意外なものだったからだ。びっくりする祐に弥生は続けた。

「ほらっ、私も三年生の時だったかな? 祐ちゃんの立ちションするところ、珍しくて、じいっくと見てたでしょ? だから今回はおあいこかなって」

その言葉に、祐は身体全体の力が抜けていく感じを覚えた。

た、助かった。弥生って、まだ子どもなんだ。

祐はそう思いながら、トイレのドアに脱力して寄りかかった。

「ねえっ、ちよっとお、出られないんだけど」

弥生の声で我に返る。あわてて祐は離れてドアを開けた。すると、飛んで来たのは右手のビンタだった。

ビシャン、という音と一緒に、大きくしりもちをつく。

「いつてえー」

あまりの痛さに、半べそ顔で弥生を見上げる祐。弥生は祐の前に仁王立ちで、

「ほんつとは、すんごく恥ずかしかつたんだから! 今度やったら絶交だかね!!」

あまりの怒りに、声は裏返っていた。

祐はあやまった。素直にあやまった。ただひたすらに、半べそ顔であやまった。

まるでバネ仕掛けの人形のようなそのあやまりように、弥生の方が祐を止める。うるうるうるうるした眼まなこの祐は、半開きの口でまだ

泣きそうな気配がやまない。困った弥生は、

「今度、祐ちゃんの立ちション見せてくれたら、許してあげようか」と、ニマツと笑いながらうそぶき、小さな胸を張った。

(後書き)

シロイイ ヴ (^ - ^)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2993/>

性の水音

2010年10月8日15時05分発行